

第 42 号

昭和60年 3月

会報

発行 北海道高等学校

教育研究会事務局

札幌市中央区旭ヶ丘6丁目5番地18号

札幌旭丘高等学校内

電話 561-1221番

ごあいさつ

北海道高等学校教育研究会

会長 尾崎信夫

暦の上ではもう春というのに、このところ連日の厳しい寒さに加えての大雪でいろいろと難儀のことと存じます。そして例年のようにそれぞれの学校では、年度末の反省や卒業式、高校入学者選抜その他の業務で、ご多忙の日々をお送りのことと思います。

先日は新年早々約4,000名に及ぶ会員の方々のご参加を頂いて第22回の研究大会を盛大に開催いたすことが出来ましたことを大変嬉しく思います。

本年は年明け早々臨教審の教育改革の論議が新聞やラジオ、テレビの報道を賑わしていますが、私達現場におります者にとって極めて関心の深い問題でございます。全体集会における黒羽先生のご講演の中でも取り上げられましたが、なぜ今教育改革かと言った問題の周辺を見極めなければならないものだと思います。戦後の6・3・3の教育制度は国民の教育レベルを高め、技術革新やそれに伴う産業界の要請に応えて成果を挙げ、今日のわが国の発展に貢献したことは事実であります。しかし、教育の民主化と申しますが、国民の教育熱は高まり今では高校進学率94パーセントにまで上昇いたしました。こうした中で高校においては、多様化された生徒の指導が難しくなり、現場における教師の努力にもかかわらず、中途退学や登校拒否或いは非行と言った問題が多発しています。だから教育改革・教育制度を変えなければならないと言うのには可成り問題があるように思います。教育改革は学校教育の範囲のみでは解決されるものではありません。社会が個々の人間の集合体であるならば、当然のことながら個々の人間に視点を合わせて人間性を尊重した教育の在り方が確立されなければならないものと思います。

要はこれから各自の人生を自らの力で力強く生き抜いて行ける人間の育成が大切になるものと思います。所謂生涯教育の観点に立って家庭教育・学校教育・社会教育の役割り分担を明確にしていくにはどうしたならば良いのか、それを見直して組織化しようとするのが今回の教育改革でなければならないと思います。これらはあくまでも教育を受ける者の立場に立った改革でなければなりません。こう言ったことについては、既に中教審の中でも、社会教育審議会の中でも取り上げられ、新教育課程の改定のねらいとし提起され今現場で真剣に取り組んでいるところです。臨教審の中では十分に論議を交わされ、単なる教育制度いじりに終わることのないように期待するものです。教育改革が単なる制度いじりでないとする以上、私達も自分達の足下をしっかりと見つめ、今我々の周辺に有る問題点の解決に向けて努力しなければなりません。そう言った点から会員の皆さんとの日常の研修を切に希望いたすものです。第22回研究大会においていろいろとお骨折りいただいた役員の方々に深く感謝いたし挨拶といたします。

〔日程第一日・全体集会〕

〔全体講演〕 (午前の部)

〔講演要旨〕

「なぜ 今 教育改革か」

日本経済新聞社論説委員 黒羽 亮一氏

1. 臨時教育審議会の在り方

昨年（昭59）1月の首相発言に端を発し、8月の法案成立により臨教審が発足したが、これに対しては教育を政治に利用しようとするものだという批判も多く聞かれる。しかし、昭和50年代に入った頃から急激に質の変化が見られる学校教育の現状に対し、種々の教育団体を始めとする教育専門家集団が実質的な改革の成果をあげてきているかと言うと、残念ながら首肯し得ない。また、政府与党とそれに批判的な野党及び専門家集団との対立それ自体は、肝腎の教育改革をないがしろにする空無の問題であると思わざるを得ない。あくまでも教育改革自体を視野の中心に据え、対立を収斂させていくことが、臨教審の担わねばならぬ役割であると考えている。

2. 学校制度の歴史と問題点

近代学校制度は産業社会の発展とともに生まれ変遷してきたのであった。近代以前、所謂初等教育は、家庭・職場・宗教的機会等に融合して存在していたのであったが、ヨーロッパ産業革命以後の社会構造が大衆に統一的な知識・教養を要求したため、近代初等義務教育制度が生まれた。さらに、初・中・高等教育それぞれを連続したものとして結びつける統一学校運動の影響もあり、学校教育は大衆化されると同時に、産業社会の要請と密接に対応して制度化してきたのであった。

西洋の文化・制度を移入することから始まった日本の近代化は、教育制度においてもほぼ同様の道を辿る。つまり初等教育の義務化による教育の大衆化が行なわれる一方、明治30年以後の産業政策の隆盛に伴い、個人の学習意欲が社会・国家の向上につながるとする学校教育立国の理念が掲げられて産業の高度化に対応するのみならず、帝国大学を頂点とする学歴が文化的な価値基準になるまでに至ったのである。戦後は更に6・3・3・4制が確立し、初・中・高等教育がそれぞれ労働者層・中間層・管理層に対応して位置づけられるようになった。

しかし現在、高校の進学率は90%を越え、高卒男子の4割が大学へ進むという状況を迎えてからは、大卒者が必ず社会の管理層に位置づけられるという図式は成立しなくなってきており、学歴は依然として社会の価値基準ではあるにしろ、高等教育はランク付けられて多層化せざるを得なくな

ってきている。昭和50年以後、「脱工業化社会」・「生涯教育」が称えられ始めたのは以上のような変化によるのである。今後は「～のための教育」という近代学校教育の理念が、浮動し多様化する社会の変化に通用しなくなることは明らかであろう。制度の改革が急務な所以である。

3. 学校自由化論について

学校自由化についての多様な解釈が混乱を招きつつあるが、次の3つに収斂させて考えたい。まずは憲法26条を根底に置きながら、学校や教育形態を選択できる自由をすすめること（選択の自由化）。次に、高校を4年制とするなどして、現行の6・3・3・4制をより弾力的な制度と考え、工専を増設し、私立工専等の設立も考慮してはどうかと考える（制度の自由化）。最後に主として義務教育のカリキュラムをよりシンプルなものにしてはどうかと考える。小学校1年時から7教科を履習させ、スペイナル式でカリキュラムを設定するという現況には疑問を感じる（カリキュラムの自由化）。教育が恣意に流れる心配はあるにしろ、より弾力性のある改革を望みたいところである。

4. 生涯教育・学校観・教師観

学校教育というものは、生涯にわたり学習し教育を受けられるための基礎固めをする場である。――というのが生涯教育の理念である。とすれば、生涯教育は意欲の教育であるという一面をもっているだろう。しかし、5教科をまんべんなく履習し偏差値化していくことからは、学習意欲の育成は望めまい。今、何故生涯教育が必要とされているのかを検討してみる必要がある。

社会の様相の著しい変化に対応する形で生涯教育論が高まってきている現況を無視するわけにはいかない。視点を変えてみるならば、近代学校創立以来、私達は教育というものを余りにも学校中心に考えすぎたのではないだろうか。教育の場そのものについて考えなおす時期に来ているように思われる。学歴社会のはらむ矛盾はいまだ数多くあるにしろ、それは言わば入口の学歴社会である。一方出口と言えば、多様化・多価値化しているのが現状であり、そこに今後の道が開けそうな気がするのである。

教育の現実的な担い手は教師であるならば、その今後の在り方についても考えなおさねばならない時期にきているだろう。聖職か労働者か等という論議もかつて聞かれたが、やはり教職は広い視野をもった現場の専門職であって欲しい。いうまでもなく教員免許がその専門性を保証するのではないとすれば、真の意味での専門性とは何かを考えていかねばならないのではないか。

臨教審のなげかける問題に対する受け取り方は様々であろうが、原点に立ち戻り考えるならば、

教育政策とは制度の改革であると同時に、国民一人一人が教育とは何か・学校とは何か、と考えるきっかけになるべきものではないだろうか。

〔全体講演〕 (午後の部)

〔講演要旨〕

「北方民族における伝統と近代」

北海道大学文学部教授 岡田 宏明氏

北方に住む原住民、中でもツンドラ地帯で獲物を対象にして生活している狩猟民は、インディアンよりエスキモー（生肉を食べる人）と呼ばれていた。エスキモーの生活実態については既に『カナダ・エスキモー』（本多勝一著）などで紹介されているが、自分が研究対象にしたのはアラスカのエスキモーについてである。エスキモーと呼ばれた人は、アラスカ、カナダ、シベリヤ、グリーンランドなどに住んでいる。

アラスカ・エスキモーも20年前（1960年代）までは、氷の海でアザラシを取り、雪原の上でカリブー（トナカイ）を追う移住生活であったが、文明社会の波が押し寄せるようになり、その生活実態も大きく変化してきた。エスキモーの伝統的な生活習慣である“生肉を食べること”“移住生活であること”“妻貸しの風習”なども厳しい寒さの中で生活する者の知恵であり、社会生活での工夫であったのが、近代化の波、白人との接触により根底から覆されてしまったのである。

今日ではアラスカ・エスキモーのほとんどが定住化し、パイプライン工事等に従事する人夫として現

金収入に頼る生活となり、その食生活も根本から変化してしまった。教会、学校、商店、飛行場、と文明化が進み、食生活もパン、牛、豚肉、砂糖等の白人風の生活に切替わっている。しかしながら近代化の波は様々な問題を提起することになった。食生活の変化が、肥満、コレステロール障害などの文明病を増加させ、それらの病人を収容するための病院が作られたが、そこに入院させることにより、家族から離れて暮らしたことのないエスキモーは精神障害を起こすようになり、更にその対策も迫られるようになった。一方では、50番目の州となったことにより、従来からの習慣である鴨や鯨を取って食べる生活も、渡り鳥保護協定や鯨保護問題に抵触することになり、処罰問題も起きるようになった。また居住地域であった土地そのものも国に組み込まれたが、その一方では市民権も投票権もない生活を強いられており、そうした問題解決のために1967年にはアラスカ原住民同盟（インディアンを含む）が結成された。1971年にはアラスカ原住民土地請求権解決法案が提出され、失地回復に取り組んでいる。そのための補助金が10万ドルも集まったという。

近代文明の移入がエスキモーの人達にとって幸福であったかどうかは別として、一度経験した生活を旧に戻すことはできないので、現在の生活実態の上に立って、白人と同等の地位獲得、伝統的な生活習慣の確保、労働条件の改善等、今後取り組むべき問題が多い。同じ北方圏に住む我々北海道の人間は、同じようなアイヌ問題を抱えてもいるので、他人事とせずこのエスキモーの問題に取り組み考えていかなければならぬのではないか。

〔日程第二日・部会別集会〕

国語部会

〔研究発表〕

①「わかる授業を目指して

=プリント学習による「国語Ⅰ」の指導=

厚岸潮見 真壁 智誠

本校の国語カリキュラムはどうあるべきかを教科内で話し合い、国語Ⅰでの表現指導をプリント学習を通じて行なうことにして、入学学力検査の分析結果から、①文章を書くことに慣れさせる。基礎的な書くきまりを習得させるの二点を目標として設定し、授業をすすめてきた。

結果として、単元教材のねらいや授業の目標が明確になり、生徒にとっては学習しやすく、短作文の練習にもつながった。

►質疑

○歌志内・中川——プリント学習のデメリットは、意外性のある授業展開ができぬことでは。

○司会 平田——生徒作品への対処の仕方。

►答——デメリットはその通りである。生徒の作品の文体は、直さないことを基本にし、誤字、脱字、主述のよじれなどをチェックする程度にとどめている。

②「学習意欲を高める「国語表現」の指導をどうするか

=科目の内容構成のあり方・評価方法などをめぐって=

網走南ヶ丘 粕倉 正明

本校では、3年生に自由選択科目として「国語表現」を2単位で履習させていた。その中で独自の教材を利用して、授業の活性化を図ってきた。

①新聞の社説、コラム、文芸欄の書写。②パロディ作り。③マンガ吹出しの改作。④3分間スピーチの原稿作りと実演などである。これらを通して、生徒は書くことに対する抵抗がなくなり、気軽に、しかも的確に文章を書くようになった。

►質疑

○釧、湖陵、富樫——資料にある教材配列の意図。
○札・厚別・前川——担当者二人のコンビネーションはどうだったのか。

►答一言語活動を通じて「理解」から表現へ「自己理解」から「自己表現」に至るよう教材配列をしている。また二人で担当することは、得意な部分で補い合うことになり、結果的にみて大事なことであった。

③「文学教材(詩)の扱いをめぐって
=試みを中心に=」

北広島 手塚 熊

「いい詩とは……わからなくてもいい」(1981.7.8)
と杉山平一氏が述べ、「教師と生徒が思い思ひに感性と想像力を解放し、それぞれに文学的感受性のかきたてられようを楽しむ」(長谷川宏)と言う立場を理解しつつ、詩の教材を通して生徒との生き生きしたぶつかり合いを求めてみた。

室生犀星「小景異情」の鑑賞にあたり、さまざまの「案山子」「ひきしお」の歌詞を利用し、身近な音楽を通じて詩に接近することを試みた。

►質疑

○新得、田所——杉山氏の論のように、いい詩はわからなくてもいい、という立場なのか。

○置戸、藤川——教科書にある詩は意味不明なものはないのではないか。わからない今までよい、ということに疑問を感じる。

►答——語句の評価はきちんとすべきだ。読者の想像の世界にゆだねてよいものまで、選択肢を設けて理解させるようなやり方はしたくない。

社会部会

〈現代社会分科会〉

[研究発表]

「『現代社会』における指導・学習過程の総合研究」を主題に、初めに、上川教育局指導主事、木戸口道彰先生から「現代社会の実践研究とその動向」と題して、『現代社会』3年の経過と課題について、以下の内容の講演があった。(1)57年度では「指導計画の作成」が課題で、内容の割合の検討、地域実態の捉え方、教授組織の問題が中心となり、(2)58年度は「指導方法のあり方について」で、生徒をどのように主体的に参加させるかがテーマとなり、総合的に判断させるための主題学習、地域素材の開発・教材化、巡査・野外調査、視聴覚教材の活用などが各校で実践され、(3)59年度は「評価の問題」が中心となった。評価については、知識・理解、資料の活用能力、社会的思考力・判断力の観点に関心・態度が加わり、今後は『現代社会』のねらいに則した指導と評価のあり方が望まれる。

研究発表の部では、利尻高校の成田知弘先生から「『現代社会』の目標を実現するための一実践」と題して、同校での評価のあり方を中心に実践例が紹介

されたが、特に4つの評価の観点の中で「関心・態度化」についての見解や独自のレポート作成により生徒の自主性、積極性が育成されたことが参加者の関心を高めた。札幌西高校の手塚賢先生は『受験校の現代社会』への模索」と題して、共通一次試験を念頭においた授業とその工夫を(1)基本事項の理解、(2)そのための歴史的アプローチ、(3)テーマ毎の完結的・総合的内容となる授業の組み立て、を中心に述べられ、『現代社会』に望まれてきた指導方法を「帰納法的方法」とし、自身の「演繹法的方法」と称し、指導方法に新たな視点を提示された。両先生の発表に対して、『現代社会のねらい、教材の具体例・実践例、評価のあり方について活発な議論がなされ、助言の尾崎俊一、木戸口道彰両先生から、評価と指導内容の今後のあり方特に「関心・態度」は授業態度ではなく、「社会科として求める関心、態度」という視点に立つことと一緒に発足3年を経て、「見直し段階」に入った『現代社会』の「発想の転換」と教科構造の検討についての説明、論及があった。

最後の講演では、「これから消費者行政と消費生活について」というテーマで、名古屋経済大学教授、小木紀之氏から、(1)消費者問題の多様化と消費者行政の進歩、(2)59年の「消費者行政会議」から、特に、高齢化社会における消費者問題、(3)その関連としての「老人の生きがい」の問題、(4)消費者教育のあり方特にアメリカにおける州立大学の地域社会、産業界、消費生活に与える影響と意義、(5)情報化社会と消費者問題—情報への対応を身につけることの大切さについて、興味深く、示唆的で、『現代社会』の教材に活用できるお話をあった。

〈地理分科会〉

[研究発表]

①「地理における指導・学習課程の総合的研究について」

古平菊正敏

今日、生徒が授業に対していかに関心を高め学習していくか工夫し実践するには、変化していく生徒の意識に対処して意欲をもたせていく上で、どのような学習課程にも共通する基本的課題である。地理の指導にあたって地域の多様化した生徒の実態を十分考慮した上で、指導者の発想と生徒のレベルがうまくかみ合い、向上していくよう練られたユニークな作業学習の具体例を発表された。「遊び」的発想を取り入れ、地図学習の「イラストマップ作り」、地誌学習では班学習による「紙芝居」の作成発表による理解など工夫された興味ある実践例を示された。

②「地理における Systematic - approach と Regional approach の総合化についての一考察」

富良野市原茂

新地理の実践を通して、どのように生徒が地理的な見方、考え方を理解していくことができるか、学習意欲を高める指導法を検討し精選した学習内容が

どう興味・関心に結びつくか、生徒の興味を持った国の発表学習の実施から考察した学習課程などを多くの資料をもって発表された。依然として指導内容の広範な新地理の精選もその実践にねらい、評価の観点をしっかりと把握し、人々の生活の舞台、人々の生活が伝わる内容をもたせた魅力ある「地理」の方向を探らねばならないだろう。

[講演要旨]

「地理教育における今日的課題」

東京都立上野高校長 品田 耕氏

地理教育において常に心がけてきたことは第一に知識偏重ではない、一つの事象から多様な問題点をひき出させる、考えさせる地理学習の推進であり、第二に見たものについて常に疑問を持たせること、すなわち観察力の養成である。

教職についてから視聴覚機器の活用における先導的役割を担ったり、統計利用の工夫など多くの研究を手がけてきたが、この間最も精力的に取り組んだのは発表学習である。学習の目標、態度、方法を事前に適確に指導し実施してきたが、この際教師が最も考慮すべき点は発表テーマの設定の工夫であり、発表学習の成否がここにあると言っても過言でない。

現代の高校生の思考の風潮は、結論を急ぎ思考過程において洞察力に欠けることである。これを克服する上においても、発表学習の推進は重要な要素であり、ひいては考えさせる教育の確立に寄与するものである。

〈倫社分科会〉

[研究発表]

①「読書活動による『倫理、学習』」

札幌東豊 桜井 芳徳

「ソクラテスの弁明」(原典)を通して、ただ単に知識の習得にとどまらず、「自己教育力(読む力・書く力)を養うために、通読そして倫理ノートを作っていくことは、それ自体倫理学習が求める『考えること』にほかならない。これまでの経験から、読書活動の効果的利用についての発表。

[質疑応答]

倫理は全生徒に必修にさせる要素がある。対話というものが人間を動かす根本とすると、それは倫理そのものである。ただ現状は受験との絡みで選択者が減る傾向にあるが、種々の点から現代社会の倫理分野だけでは、本来社会科が求めているものが薄くなり継続させる必要がある。また、考えることが苦手になっている生徒達に『思考させること』ができるのは、やはり倫理だけではないか。

[講演要旨]

「ルネサンスと地中海」

東京大学助教授 樽山 純一氏

ルネサンスとは、古代の復活そして欧洲近代知的

世界の出発というのが一般的定義であるが、この半世紀に幾つかの見直しがされた。

ルネサンス=古代の復活(ギリシア・ローマ文明の復活)は、古代文明が一千年の眠りから覚め、14~16世紀に再び姿を現し、古代の人々の考え方・生き方が復活した、と欧洲人は言う。その意味は3つある。

1. 古代ギリシア語がラテン語訳され、テキストとして受け継がれてきた。
2. イタリア人の過去の文化遺産の認識による栄光ローマの復活。
3. イタリアルネサンスの中では遅くまで上って来なかつた古代ギリシアの復活。

上記は違った意味と経緯を持ちながら起こったが15世紀後半に別々ではあるが出揃った。氏はこれから別の角度から考察する。

・地中海文明について、東地中海ではビザンチン帝国がヘレニズム化された古典文明を受け継ぎ、東ローマの名のもとにギリシア文明を基礎とした帝国を維持し、西地中海ではイスラム帝国が古代オリエント+ヘレニズム文明に触れる地に乗り出し、過去の遺跡物をイスラムとして解釈しながらも、本来の姿で正統に受け継いだ。

・欧洲人の考えるべき古代とは、地中海文明としての古代ではなく、森林深く住んでいたケルト人・ゲルマン人を意味している。ケルト人・ゲルマン人はあくまでヨーロッパ文明であり、地中海文明を受け継ぐことはなかった。古代文明の扱い手にならないことにより、つまり一千年の眠りから覚めてルネサンスを起こした。そしてイタリア人はヨーロッパの新しい文明を自らの手で作り上げたのではないか、とのご指摘であった。

〈世界史分科会〉

[研究発表①]

「世界史授業での語句の理解について」

=生徒は学習中の用語を理解しているか。その実態と、対応する授業と評価について=

釧路東 江口 寛人

最近の授業がわからないという傾向、深刻な世界史離れを考察し、7点の要因を挙げる。その中で特に、「授業時間に使用する語句が生徒に理解されない」という点に注目し、その実態把握と対応等の研究発表がなされた。

(1)授業中に用いられる語句に関するレディネス調査。

手続きとしては、無作為に現在使用中の教科書から抽出した50語の意味を質問。第1回は1学年に対し、記述式で回答させる。第2回は語句の理解度と生徒の記述能力のギャップを考え、3者択一回答。第3回は2学年・3学年に対し、第2回と同一方法で、現代社会・世界史を学んだ後の変化を調べるために実施。そして、次のような生徒の傾向を考える。
①常識的な語句の意味がわからず、国語力が弱い。

②中学社会科の知識の未定着と語彙の量が学年を経てもあまり変化しない。③語句の理解がステロタイプであり、記述の能力が非常に低い。

(2)生徒の実態に応じた授業例。

このような生徒に対応するための手段として4点挙げ、この4点を講義形式・課題学習・グループ学習の3モデルの授業形態の中で検討する。そして、特に言語以外の情報によって歴史事象に関するイメージを形成させ、個々の歴史的事項を演繹する授業例として、聴覚情報(音楽)、視覚情報(スライド)を基礎においていた2案が示された。

(3)(2)に対する評価法。

[研究発表②]

「世界史における総合化」
=10学級一斉指導における4×35時間の実践=

札幌平岸 田中 一秋

手を加えれば伸びるが、放っておいても自分で学習する習慣の少ない生徒の実態報告の後、生徒の興味・関心を高め、主体性のある授業、かつ受験に対応できる授業の検討と実践記録が報告された。

「世界史の総合化」の解釈として、①複数の教師が個々の持ち味をいかしながらも、10学級同じ指導・同じ内容を展開、②教師主体の講義一辺倒に終始することなく、視聴覚教材をふんだんに盛り込み、一般書籍も積極的に教材化して、生徒の思考・活動を引き出して主体的に参加させる授業の展開、③授業の構造化を計り、1時間1時間のすべてにおいて主題を明確にし、完結する授業の展開であるとした。

以上の前提をふまえ、以下の授業が実践されている。①プリント学習：1時間で完了する内容と主題をもつ。授業の基本として、全時数分作成。②視聴覚学習：VTR・スライド・写真集利用。視聴ノートを採用。③歴史新聞：夏休みの課題として作成させる。今後、授業の中に取り入れる事も検討。④発表学習：授業時間内で読んで、まとめ発表。今年度は岩波新書『イスラーム』を使用。

[討議]

多くの学校で、研究発表同様の生徒の実態を再確認するとともに、両発表の実践例に少なからぬ示唆を得た。又、札幌創成他6校の実践状況も報告された。

[講演]

〈倫理分科会〉と同じ。

<日本史分科会>

[研究発表]

①『『地域社会の歴史と文化』の取扱いについて
=視点とその実践=」

秩父別 高橋 純

当初、北海道史の扱いでは学説紹介的になり効果は少なかった。後に生徒の引込み思案な傾向に鑑み、農村地域である地域性を主張しつつ生徒を成長させたため、農民の生き方を理解しよう農村地域

を意識した授業をし、ゆとりの時間では郷土館見学を行っている。授業では「空知農地改革史」等を使用し屯田兵の移住等を具体的に把えさせ、そのような人々の手紙などを読ませて先駆者の人生に触れさせ、生徒自身の生き方を問い直し自らの轍をうち破らせようとした。ここにこそ、郷土史の意義ありとする意欲的研發であった。

[研究発表]

②「歴史学習の中に歴史的な見方、考え方を養わせる学習へのアプローチ=近代史学習における試み=」

浜頓別 桧田 規文

教科書的・中央史的「歴史の流れ」を“光”的部分とすれば、光を支えた人々や地域史等、“陰”的部分の存在も重視し学ばせることで、歴史学習への興味・関心を啓発し、歴史的な見方・考え方を養わせる学習法を試みた。

特に近代地租改正の取扱いでは、地券の着想者としての神田孝平の役割・又地域史として浜頓別町史の扱いでは、金採掘法・当時の村人の生活状況等不明な部分に含め、生徒自身の手で歴史を探らせる試み等、“陰”的部分の指導を中心に発表された。

[全体討議]

地域史を扱う場合、教師が取扱う意図を明確化すること、中学との関連を考慮すること、教科書全領域に触れる前提で扱うべきこと、教員間の共通理解は不可欠だ、教師の地域史教材研究より深化すべきだ等、充実した討議だった。実践例として「オホーツクに生きる」女満別高社会・国語、「北海道の歴史と文化」雄武高、などが紹介された。

[講演要旨]

「北海道史上の『近代』」

北海道開拓記念館学芸員 桑原 真人氏

- 1) 従来の国史的日本史で地方史は差別されてきたが、林屋発言を契機に地方史の見直しがなされ、その基盤が拡大されてきたこと。
 - 2) 北海道と沖縄は特異な歴史を歩んだ。「内地」「本土」なる意識、民族統一とアイヌ民族差別問題、行政施行年にみる権利保障の後回し、外地植民地支配体制の「原型」として求められた内国植民地としての同質構造等。
 - 3) 沖縄同様、北海道史の独自性とその位置づけの研究、自己完結的な北海道史の研究、そしてそれを日本史の中に積極的に提起することによって教科書的な日本史像を修正する可能性を持った地域、それが北海道ではないか。
- 以上簡略な箇条書きにとどめたが、氏の真意が伝えられたかどうか、会員諸氏の叱責を乞いたい。

<政経分科会>

午前、北海道財務局理財部金融課長・植田修己氏の講演のあと、午後「政経における指導・学習過程

数学部会

の総合的研究—指導内容・方法・評価の一体化—」のテーマのもとに板東（北広島）会員の報告を基調に研究協議を行なった。概要は次のとおりである。

〔講演要旨〕

「金融自由化の現状と課題」

北海道財務局金融課長 植田 修己氏

まず、金融自由化の背景について、一昨年のレーガン大統領訪日で「円・ドル委員会」の設置が決定されて以来、米側の要求の高まりと、我が国の経済構造の変化に内在する諸要因、①金融の国振化、②金融の証券化、③金融の機械化、④国民の金融資産に対するニーズの多様化、以上のような環境の変化に近年、かなりの速度で進んでいる。次に、金融自由化に対する基本姿勢は、金融自由化は我が国の金融の一層の効率化と、国民経済的にみて基本的に望ましいものと考え、金融や証券行政において諸般の自由化や弾力化の措置を、今後とも前向きに対応する。

金融自由化の現状と今後の展望を、(1)金利、(2)金融・資本市場、(3)業務内容、(4)業界・制度問題等について、2時間にわたって具体的に詳細に展開され、参加者の金融自由化についての現状認識に大きな示唆を与えた。

〔研究発表・研究協議〕

政経部会の主題、「政経」における指導、学習過程の総合研究について、北広島高校板東修身会員から、「現代社会」に関連して選択「政治・経済」の学習指導について、実践研究発表、その後、質疑・討議が行われた。

研究発表要旨は、はじめに、「現代社会」における学習指導の実際に即して、学習ノート、主題学習による指導を通して学習成果を上げていること。また、「現代社会」の指導の困難点を教師サイドからと、生徒サイドからとらえ今後の課題としていること。次に、「政治・経済」の「日本国憲法と民主政治」の指導にあたっては、1.「現代社会」との関連で、(1)目標・内容の関連で、再度学習する部分、(2)「政治・経済」では重複をさける部分、(3)「現代社会」で学習せず、「政治・経済」で学習する部分。2.「政治・経済」の科目の特徴から、日本の今後について思考させる。3.歴史的背景や社会的・経済的条件などを重視させる。4.深く学習させる(高度な洞察力)。以上のことについて、生徒の能力や学習の発達段階を考慮して学習事項を精選し、理論的・体系的に学習させ、客観的理解を深めさせながら、政治や経済などについての見方や考え方を深めさせることを目標にして実践している。

研究発表後、選択「政治・経済」の学習指導内容(教材構成)、指導方法、評価についての3点を柱に活発な協議が行われた。

〔講演要旨〕

「直観的理解と論理的理解」

津田塾大学教授 笠原 乾吉氏

今の生徒は、直観的に理解することはできるしそのことは必要であり大事であるが、それをもって全てを理解したように思ってしまい、論理的に理解しようとしてしない。それをどうするかが我々教師の課題である。

ワイルは数学における抽象性、論理性を反省し現代的に厳密に展開することを考えた。そのためには論理的なものの考え方が出来なければならない。このために、他人と議論をするという場を作る必要があるのではないか。日本の数学教育において幾何教育がなおざりにされているのは、小さい時から議論をさせる場が少なかったからである。スペディによると右の脳と左の脳を切断できるようになり右の脳にもわざかながら言語能力があることがわかった。右の脳が映像、空間の認識がすぐれているということである。この左の脳と右の脳の働きの研究がこれからからの教育に役立つであろうと思う。従って論理的に議論をすることは、数学教育を行うためのベースであると言える。

ドイツのシュタイナー学校では、何かをはじめるときにその対象にむけて濃厚な集中を徹底的に行なうということをさせている。日本の数学教育においても実際に具体的に観察、実験させることにもっと時間をかけて行わなければ上滑りの理屈だけのことになってしまふ。教育の根底にあるべき経験(議論を含めて)が不足しているので日常生活の中にもっと取り入れなければならないが、もしそれが出来なければ教育の場でそれを補っていかなければならない。もっと作業をさせることによって、「自分で自分をしっかり捕え、自分の深い内部の欲求から自覚的に行動させること」がシュタイナー教育の目標であり、今の教育に欠けていることである。シュタイナー教育をもっと勉強してみると面白いと思います。

〔研究発表〕

①新教育課程における教IIの指導と問題点

夕張北 丸山登太郎

教師が教IIの役割を認識し教材研究を十分行い、わかりやすい授業を行うことにより面白さも出てくる。

②情意を形成する授業の導入はいかにあるべきか。

芦別 矢代 和明

生徒一人一人がよくわかる、できる授業を実施すること。情意形成の評価の仕方の研究。

③基礎学力の定着と学習意欲向上のための学習形態の工夫について

旭川北 原 順一

生徒を主体的に活動させる学習形態について班別学習の実施と一斉授業とのかかわり。

④ひとりひとりの習熟度に応ずる自然学級における

指導上の試み

帶広柏葉 上山 功夫

自然学級におけるグループ学習の実施や板書の工夫、公式の言語化、到達度テストの実施とその評価により習熟度の広がりを防いでいる。

理 科 部 会

〈理科 I 分科会〉

望ましい理科 I・II の指導はどうあるべきか、をテーマとして、高村泰雄、北大教育学部教授の「理科 I の理念と方法」と題する部会講演が行われた。理科教育の歴史的経過をふまえて、基礎的かつ総合的な科目である。「理科 I」は、人間と自然との調和が実現されねばならない現在にこそ、その存立の必然性がある。理科 I の成立条件として、「自然学」の視点が必要である。人類発展の可能性を科学教育の基本にすえながら、理科 I を発展させてほしい、との主旨が述べられた。

研究発表では、まず「理科 I の必要性とその展開」と題して、野田四郎（札平岸）教諭が、次の 2 つの観点から理科 I の理念にアプローチされた。第一に、自然を構成する要素が互に影響しあう系では、従来の分析的手法ではなく、総合的・多角的な見方が必要。第二に、一般理科教育の総まとめと、専門教育の入門との両立を図ることである。

質疑応答として、野田教諭に対し、山田大隆（札藻岩）教諭より、エントロピー概念の教材化について。高村教授に対し、新妻徹（厚真）教諭より、理科 I・II の固有の評価体系について具体的に問われた。

助言者の塩川信（八雲）先生より、理科 I の理念に対し、広域カリキュラムと中核カリキュラムの問題、および文化人類学的成果を含める点が強調された。

後半の研究発表では、4 件の実践報告がなされた。鶴川昌光（旭凌雲）教諭より、「本校における理科 I 指導とその課題」として、教師相互の研修体制、資料「ひまわり」を通して生徒との関わり、一人担当制の実践結果が報告された。板東節子（札静修）教諭より「私立女子高校における理科 I の実践報告」として、理科 I 8 単位履修および実験を主とした理科 II の実施内容が説明され、高校で理科教育を終了させる生徒への展開例が示された。梅原宏之（上ノ国）教諭より、「理科 II を 1 年間実施して一理科 II の指導はどうあるべきか」として、生徒のグループ別に研究テーマを設定させ、研究活動・発表へと指導をすすめた例が報告された。荒井義昭（苫工）教諭より、「理科 I の『自然と人間』の実践記録」として、新聞雑誌の教材化や校外学習などの多角的な取組みが発表された。

研究協議として、理科 I 一人担当制について意見が求められ、鶴川教諭より、専門外分野の問題が、野田教諭より、教師相互の学習会や視聴覚教材の活

用の例が示された。他に、3 学期の評価、自然保護などが話された。

最後に、河村勁（理科教育センター）先生より、理科 I を生涯教育的な立場でとらえる必要性、理科 I の精選の方向性、理科 II による実験観察の補充などが助言された。

さらに、全国理科教育大会（北海道大会）への研究協議・発表への依頼があった。

〈地 学 分 科 会〉

〔講演要旨〕

「放散虫化石からみた北海道の中生界」

北海道大学理学部助手

理学博士 岩田圭示氏

- 1) 放散虫化石が示準化石として用いられるにいたった歴史的経過について

ヨーロッパでは、1800 年代の後半のころから、生物化石としての放散虫は理解されてきており、プランクトンとしてチャート中に沢山含まれていることがわかっていた。日本では、1930 年代に三波川結晶片岩中の放散虫化石について、前東大教授小林貞一先生と、東京教育大教授藤本治義先生との間で、一つの論争があった。それは、小林先生がこの化石を古生代末から三疊紀とするのに対して、藤本先生は、中生代ジュラ紀との説をとったことによる。しかしその後、放散虫化石に対するみかたは、生存期間が長く、時代決定には役立たないとされてきた。ところが近年になって海洋底ボーリングが盛んにおこなわれ、コア中に含まれている多くの放散虫化石の研究により、示準化石としての有効性がわかり、第三紀からジュラ紀までの地層の同定に使われている。さらにアンモナイトと共にできる放散虫化石との数年間にわたる対比研究からも、やはり示準化石として役に立つことが立証されている。

日本では、高知大学の研究者達により四万十累層群について、いまから 7 ~ 8 年前に放散虫化石による時代決定の研究が行なわれ、現在では、放散虫化石の進化過程および時代決定の分布表が出来上り、示準化石としての地位を確立している。

- 2) 放散虫化石を岩石中より取り出す法

- ① 比較的やわらかい岩石より取り出す法

10% 程度の過酸化水素水をビーカーに入れ、その中に岩石を入れて、20 分ほどボイルする。岩石は泥状になるので、それを、上が 14 メッシュ、下が 200 メッシュぐらいのステンレスのふるいの中に多量の水と一緒に入れてやると、下の方のふるいに放散虫化石が残る。

- ② 比較的かたい岩石中より取り出す場合

1 / ぐらいのポリビーカーに 5 ~ 10% ぐらいのフッ化水素水を入れ、それにくるみ大の岩石を入れ、ドラフトの中で半日から 1 日程つけておくと、岩石中から放散虫化石がたくさん出てくるので、①と同様の篩の中に多量の水と一緒に入れてやると、放散

虫化石が分離してでてくる。もしこのとき、化石が泥と一緒に糊状になってしまったときは、もう一度5~10%の過酸化水素水でボイルしてやると、きれいに分離してでてくる。ただし、フッ化水素は危険なので、必ずゴム手袋をし、ステンレスのピンセットを使用すること。

3) 放散虫化石を用いての各地層の時代のみなおしと修正について

……、北海道については、3年前から調査に入っているが、日高山脈の両側に帶状に分布する日高累層群は厚い地層で、大型化石がまったく出ないため、從来時代未詳とか漠然と古生代末～ジュラ紀の地層ではないかといわれてきた。それは、この日高累層群の西方に日高西縁構造帯といわれているところがあるが、ここには輝緑岩（海底に噴出した玄武岩といつてもよい）が多くあり、そのまわりに色の変ったチャートや石灰岩がみられる。筑波大の猪郷先生が、その石灰岩中より古生代二疊紀のフズリナの化石をみつけている。（当麻町）。またこのフズリナ石灰岩から数100m離れたところから三疊紀後期のコノドントの化石も発見されている。このようなことは、占冠、浦河、松前、江差、島牧などの地域でも同様であった。したがって、1960年代頃から、日高地向斜は古生代末～ジュラ紀ぐらいまでに堆積したものであると考えられてきたのである。それが、この放散虫化石の研究から、日高累層群はおしなべて白亜紀後期の地向斜堆積層である、というふうに大きく若返るという結論に達している。

以下100枚近いスライドによる説明は略。

〈生物分科会〉

〔講演要旨〕

「動物の越冬とサーカディアンリズム」

札幌大学教授 高田 春夫氏

生物が固有に持つ振動系（内性リズム）が環境条件と同調しておおよそ1日のリズム即ちサーカディアンリズム（概日振動系）を形成している様々な実例を紹介された。さらにショウジョウバエがどんな条件によって越冬の準備に入るか実験例で説明された。

〔研究発表〕

①「イトミミズの教材化」

石狩 大川 徹

従来から発生分野の教材としてカエルとウニが用いられてきている。しかしこれらの個体は生殖時期が限られていたり、都市部では採集が困難になっているなど教材としての問題点も指摘されている。我々の身近に生息し、しかも飼育が比較的容易な淡水産の環形動物イトミミズは教材としての利点も多い。そのイトミミズの飼育法とその発生過程の観察法についてスライドを用いて発表された。

〔質問〕 函館東 片岡 春三

イトミミズは教材としてどんな分野に利用できるか。

〈応答〉

生態観察などを考えているが、他にいい分野があれば御助言願いたい。

②「特別番組『地球に生きる』を利用した進化の学習に関する実践例」

清水 中村 隆之

直接の観察が困難で教科書や図解だけでは十分生徒に興味・関心を引き起こすにいたらないのでビデオによる学習を取り入れた。番組はNHK特別番組、BBC、ワーナープラザース制作の「地球に生きる」を使用した。

授業はビデオを中心に学習し、生徒の理解を高めるため、課題プリントを配付し、ビデオ視聴、グループによる討議とプリントの整理を行なわせ提出させた。提出したプリントは点検し後日の授業において適切な説明と助言をするための資料とした。ビデオによる学習は生徒に好評で学習効果もあった。

〔質問〕 札幌南陵 森葉 隆信

プリントに流れをとらえた記載がなされているのか。又班の話し合いとまとめ方はどうか。

〈応答〉

低い能力の子どもでも6・7割は回答している。VTRを見ながら走り書きをさせ後でまとめさせている。

最後に助言者の白井（理科センター）先生より両研発への高い評価と今後の課題が提示された。

〈化学分科会〉

〔講演要旨〕

「炭素化合物について」

北海道大学助教授 大沢 映二氏

先生は、I、炭素化合物の化学、II化学の研究におけるコンピュータの利用について講演なされた。Iについては、アダマンタンを例として、炭素化合物では、三次元的な形が大切であり、分子に働く力も形と密接な関係があることを説明なされた。IIについては、種々の利用面のうち、化学教育面と計算機化学の面に触れられた。化学教育面では、分子模型とコンピュータグラフィックスとを比較し、より実際の分子構造を表すためには、コンピュータグラフィックスの方が優れており静電分布の状態等、有利さを説明された。計算機化学面では、分子力場計算について触れられ、コンホメーションの差による分子の歪、ポテンシャルマップについて説明され、実験化学・理論化学等との連携を取った計算機化学のシステムについて述べられた。

[研究発表]

①「理科I（化学）における基礎概念の確立のための実験について」

札幌北 角張 裕信

演者は、物質量を量的実験を通じて理解させるために、種々の実験について検討を行った。化学式量やアボガドロ数を直接求める実験では、理科Iの範囲内では、良い精度を得ることはむずかしく、生徒への理解を深める目的には、利用しづらい。そこで、モル概念を利用した実験の中で、結果が理解しやすいものを用いた方が、理解度を深める上では効果的であろうという発表を行った。

②「興味のもてる化学をめざして（II）」

当別 八島 弘典

有機化学は、煩雑で暗記事項が多く、興味が湧かないといわれている中で、演者は、①石油化学を中心に、ベンゼン、アルカンの性質・反応。②石油は、最終安定化合物という柱を基本に、「実験をしながら考察しよう」をモットーにして、レポートのあり方、1つの実験の考察から次の実験へと進む、実験例を発表なされた。

③「楽しい授業を目指して＝音楽の利用＝」

旭川東 清末 定子

演者は生徒からの質問をきっかけに、化学の授業の導入に、音楽を利用する考え出された。歌詞の中に化学で使われる用語や化学的現象を扱った音楽を聞かせると、生徒は、言葉だけの授業よりも集中力を示し、授業への導入も興味を持つ様になった。またミュージックセラティとしての効果も期待できる。

〈物理分科会〉

[研究発表]

①「理科I 物理分野での教材としての氷雪の活用」

湧別 壇 良一

ひとりの担当者が通年全分野を持つと共に地域の教材・季節感のある教材、身近かな教材をできるだけ取りあげた実習・作業を多く取り入れることに努めている。

今まで実施された主なテーマを挙げてみると、○早春型植物の観察、○つくしの胞子、○エゾタンポポとセイヨウタンポポ、○エゾバフンウニの受精・発生、○細胞の観察、○湧川の微生物、○北海道創成期（道新出版）、○惑星の観測、○今日の天気図、○電気を通す物質と通さない物質、○色々な金属、○金属原子の変身、等である。

物理分野については、昨年迄は適切な教材を取り上げることができなかつた。中学校での学習がほとんど定着していないことを前提として基礎概念の理解を目標とし、北国の氷雪を教材として取り上げよう計画している

①質量と密度

○質量の測り方、○密度の求め方、○積雪の密度を測る（深さと密度）○屋根の積雪の質量の見積りの計算

②熱量と温度

○氷の融解熱の測定（電熱線による加熱と温度変化）（熱量とは、比熱とは、温度とは？）

②「北方圏の特色を生かした理科教育をいかに考えるか（物理の視点からの教材開発）」

苫南 一口 芳勝

◇理科教育の地方化の必要性と意義

系統的学習によって知識水準は向上したが創造的能力の育成面や自然破壊の進行面で課題を新たに提示されてきている。

その意味での北国の特色を生かした身近かな現象を対象とする理科教育が、今こそ大切である。

◇氷・雪からエネルギーを取り出す。

熱と温度の項目からその中間発表をしたい。

(1)熱電対を身近かな金属を用いて作る。

(2)熱電対の特性を調べる。

(3)氷・雪の温度を測定する。

(4)デモ実験に供する装置を工夫する。

(5)理科教材の指導案を作成する。

③「「Humanistic Science の試み」

秩父別 丸山 博

時間空間的に様々な核の狭間に立たされている現在、高校物理はこの核を正視しなければならない。

イギリス、オランダ、西ドイツでは平和教育を主たる課題としているが、我国では核物理・核エネルギーは物理の教科書の最後に、旧態依然たる公式の羅列としてしか扱われていないか？

小レポートでは、 $E=mc^2$ が誕生した科学史を取り上げ特殊相対論の哲学的意義を問う。更に、 $E=mc^2$ のその後の運命をアインシュタインの生涯に焦点を合せつつ、模索する。

〈理科全体部会〉

[講演要旨]

「バイオテクノロジーの現状と課題」

花王石鹼 KK 取締役

研究開発本部副本部長

齊藤 誠宏氏

今日話題のバイオテクノロジーはハイテクノロジー（先端技術）の一分野で、産業界、学会が共働する応用学の花形であり、今回はその生化学（DNA化学）観点から述べる（バイオテクと化学の関連は高い、技術の不連続性が顕著、技術の近未来産業への影響大より）。

生命現象根底には「分子識別」作用があり、これが1970年代までの生体物質論的生化学の発展により解明された（脳神経系ニューロン網での識別、多細胞系体系での識別、細胞レベルでの識別、分子レベルでの識別）。これには1970年代の3大発見（制限酵

素の発見、プラスミドベクターの発見、DNA塩基配列決定法)が大きな要因として働いた。今日、バイオテクノロジーを扱うに当っては、概念としては、生物利用工学発想から生物の識別機能利用工学、遺伝子組替技術利用のものへ発展している。また、バイオテクの世代観としては、第一世代、第二世代のバイオテクの考え方もある。生命工学を理解するには基底物質である核酸の構成と構造を知ることが大切で、この核酸は5種塩基成分(A G C T U)のペアのちがいのみにより生命現象を司る(DNA-RNA転写のプロモーター機構、DNA-RNA転写ターミネーター機構、DNAの不連続性複製機構、蛋白合成の識別機構=DNA上の遺伝暗号による=)のは驚異的なことである。今日、バイオテクの拡がりとしては微生物、酵素の利用(バイオリアクター、バイオセンサー、分離分析手段、酵素電池等)があり、また、細胞大量培養として動物細胞(有用微量代謝産物)、植物細胞(微生物、バイオマス利用)型があげられ、また、修飾した生物の利用では組替DNA、細胞融合、高等生物育種ではクローニング、生物機能の利用ではバイオミメティックケミストリー等があげられ、応用無限である。1980年代の組み替DNA技術に始まり、1990年代のモノクロナル抗体、細胞融合技術、バイオリアクター・アルフール連続生産技術等、2000年代に向けて展望性の高い先端技術といえる。

保健体育部会

[研究発表]

①「初級者に対するスキーの指導」

～様々な条件に対応して、安全確実なスキーを行う為に～

旭川西 上杉 正三

健康の保持増進には、年間を通してすることが重要である。特に厳冬季に於て、いかに身体活動をするかが問題となる。本校に於ては近郊に多くのゲレンデが存在するため体育にスキー授業を取り入れている。校地内授業と異質な環境の中で、社会性、マナー等を身に付ける機会が多い事、また、スキーがその特性から、生涯スポーツとして最適の種目の一つと考えられる。

②「『歩くスキー』を授業に取り入れての実践報告」

北広島 大友 藤巳

本校は昭和53年開校以来、冬期間の体育授業に「歩くスキー」を取り入れ、今回で6年経過している。実践の結果、スキー授業に対して生徒の興味が増し積極的な授業への取り組む姿勢が目立つ。校内スキー大会への全員参加、生徒の体力面において持久力の増加、さらに安全面では傷害は極めて少ないと良い面が出ており、今や「歩くスキー」は本校のメイン授業であると自負するところである。

③「高校生の生き方を育てる性の教育」

札幌商業 坂本 獻

人間の性をどのように教えてよいのか、この問題は日本の教育にとって一つの焦眉の課題といえる。従って、学習のねらいを社会と性とのかかわり、文化としての性、更に結婚制度や家族など人間と性との関連やそのあり方を学習させ、生徒の価値観や認識を深めることをおいた。また性の心理や生理についても深く学習させることはもちろんである。授業終了後の感想文、アンケート調査の結果、非常に良く、授業も楽しく進めることができた。

[講演要旨]

「青春期の精神的特徴」

筑波大学助教授 稲村 博氏

最近の子供達は、傷つきやすく、非常にもうまい状況にある。

(1) 発達段階と精神衛生的特徴

思春期は、身体的にも精神的にも非常に不安定な状態にある。特にそれぞれの時期に育つべきものが育っていないければ、思春期に大変なことになる。子供がくずれるきっかけは色々あるが、これをなくそうというのは不可能であり、むしろきっかけにも耐えられるような教育、育て方をしていかなければならない。

(2) 精神衛生徵候(心の危機のサイン)

軽いうちに手だてをしていけば、専門家にかからなくても解決していく。そのためには早いうちにサイン(①身体面、②行動面、③精神面)を見ぬくことが必要である。

(3) 健全育成

身体の健全育成に見習って心の育成をしっかりと行なわなければならない。(子育観、児童観、愛情、鍛錬、早期発見、対応)

芸術部会

[講演要旨]

「私とヴァイオリン」

ヴァイオリニスト 辻 久子氏

札幌月寒高校の中嶋先生の巧みな司会で辻先生の20年ぶりというレコードの中から、美しきロスマリン、エストレリータ、月の光などのすばらしいヴァイオリン演奏の鑑賞をおひまぜながら先生のお話を進められました。

○小学校一年生のころからヴァイオリンを

お父様がヴァイオリニストということでその夢を辻先生に託されたようです。お父様が大変意志強くて計画性のある人だったので基礎をしっかり教わり、ここまでこれたということでした。

○辻先生と北海道のかかわり

先生は冬が好きで満州・中国と演奏旅行に行くときも好んで冬に行っていたということです。その満

州・中国と北海道の気候・風土が似ていて、住んでいる人も大らか、純粋で北海道は大好きというお言葉がありました。

○20年ぶりのレコーディング

形として残るからには完全なものにしたいという先生の信念からレコード数は2枚目と少ないようです。

○大切なヴァイオリン ストラディバリウス

同じストラディバリウスでも名称のついているものは良いものとされ世界でも50ぐらいしかないそうです。先生のはリクソンポインターという名がついているということです。

○ポピュラー音楽について

ポピュラーの人達が重視している人間的な本能・感情というものをクラシックの人達はテクニックとか理論ばかりにとじこもって大事にしていないというお話がありました。

○教育について

今の子ども達にどのように夢を持たせていくか、人間としての形成を大切にしていってほしい、人間としてのものが欠けていたら芸術は理解できないということから、正確、美しさ、魅力の3点を強調してお話になりました。

最後に学校で要望があれば喜んで演奏にきていただけるというお言葉をいただき先生の魅力あふれるお話を終えました。(概略のみ)

〈音楽分科会〉

音楽分科会の研発は後志地区、久藏(余市)岩本(俱知安)長内(喜茂別)三氏共同で昭和57年~59年3ヶ年の地区研修会内容と3校の実践報告がスライドを併用して進められた。余市高の場合授業効果をあげる為の様々な工夫と生徒の礼儀しつけを習慣づける先生と生徒の信頼関係が印象的。俱知安岩本先生は個人評価とグループ評価それに数値に表しにくい情意面について年間計画と評価票等を示しての報告、喜茂別高の報告は音楽活動を校長職員を含む全校規模での音楽祭に発展させた例で以上の発表を軸に活発な質疑・実践例・意見交換が展開されておりに助言者の「研發の3人の先生それぞれに創意工夫と熱意が強く感じられ感銘した。参会の各先生方も今後どんどん変っていく生徒に対応できる工夫をこらして生きた授業を、また授業に投じた動機を全般的な成果に或は地域との結びつきや生涯教育とひろげて音楽のよろこびを美しさを高校教育の柱にしていきたいものだ。」ということばで終会。

〈美術分科会〉

美術分科会は運営委員の土岐禎次先生より研究発表者、助言者、司会者などの紹介後、函館東高校梅谷利治先生が「創作廻と美術教育」のテーマで研究発表された。それは現在おこなっている「北海大廻合戦」にいたるまでの17年間のすばらしい実践の歩みであり且生徒とのユニークで心あたたまるふれあ

いの記録であった。これは、まさに大空にくりひろげられる壮大なロマンであり、参加者一同は先生の情熱とみごとな廻作りに感服し、又スライドによる映像から生徒の創作の喜びと感動を肌で感じながら大変感銘をうけたしだいである。梅谷先生は「我々はものに感動することができる心を教える使命がある」と一貫して主張されていたが、このような生き生きした生徒の姿は今後の芸術教育に貴重な方向づけを与えてくれたように思われた。時間の関係上、質疑応答は短時間になりましたが最後に田村宏先生より感想と助言をいただき、充実した内容をもって終了したのである。

〈書道分科会〉

書道部会では静内高校の恩田先生が研究発表をされた。【実用書道の学習について】のテーマで【小筆を用いての実用的な書はどのようにして授業の中に組み入れるべきなのか】とサブタイトルされ、先生が或る時賞状書きを依頼され、思う様に書けなかつた体験から学校でやっている書を全く別な実用書も指導する必要があるのでないかと考えられ、この方向をさぐって写経を指導して来られた事の発表でした。実用書は看板、賞状、冠婚葬祭の書き物を始めノート、手紙の類に至るまで広範囲にわたるので個々にふれてという訳にはいかないが根幹のところを押さえるという意味で写経を取り入れられ、可能な限りの立派な成果をあげて居られることや、そのご労苦の程が生徒の作品から偲ばれ高い評価を得られた次第でした。全体討議では評価の問題や、塾で習っている生徒のくせ字をどう指導すべきかとか、宗教的にかかわる教材を扱う場合どうすべきか等じっくり語り合われました。

英語部会

〈主題〉「生徒の学習意欲を伸ばす英語の授業展開を求めて」

〔講演要旨〕

「高校英語教育に於ける文法指導のあり方」

名古屋大学教授 荒木 一雄氏

1. 学習指導要領の改定で英文法教科書が姿を消したが、英文法は教えなくていいという意味ではない。英文法とは自分で文を書いたり、話したり、与えられた文を聞いたり、読んで理解する際の根本的規則の集合である。教室では役に立つ英語を身につけさせ、文法教科書にしばられないで自由に指導してほしい。
2. 英語をマスターするため、私達が母国語を修得する過程と同様に「状況に密着、順応した方法」で行うべきである。最終目標はネイティブ・スピーカーが獲得している広い意味での文法規則を修得させることである。使用頻度の高い文法事項から修得させるべきだが、その調査がまだ完成していないので、何を教えるか、或はその順序など現

場の状況に応じて検討するのが望ましい。

3. 実際の文法指導の中心は「いろいろな用法の原理を与える」ことである。例えば、定冠詞 the の多くの用法は実際は 1 つの原理、1 つの基盤から出ている。生徒は基本事項を教わればその原理から他のことは自分で獲得できる能力を持っている。その能力を教師が援助してやればよい。

- 1) 日本語だけで教えることに終始しない。
- 2) 補助教材を与えて自主的に文法を習得させる。
- 3) 関連する練習問題を集中的に与え、応用出来るように訓練する。
4. 今回の研究主題に関し、生徒の学習意欲を伸ばす英文法指導には次の点が大切。
 - 1) 原理を明確に教える。 2) 用例を豊富に与え興味を持たせる。
 - 3) 実用面にもふれ、コミュニケーションの状況に応じてその原理を理解させる。

[研究発表]

①「習熟度別クラス編成による中位及び下位クラスでの授業に関して」

森 齋藤 純一

学力伸長と落ちこぼれを出さないよう、教材に変化をもたらせ、生徒1人1人に分らせようとする教師の積極的な取り組みの実践。

②「教科書の内容の深化を通じて」

稚内商工 松田 晃

英語の嫌悪感を和らげ、生徒の興味関心を呼び起すため、教科書の取捨選択、特に内容背景等を深化させ「知的な楽しさ」を与える。

③「英語を聞き、話し、読み、書く基本的な能力を養うための授業、教材の工夫」

紋別北 中條 伸義

会話教材、中学校教科書を含めた英語I、IIを400頁に及ぶプリント教材を作り、プリント学習を中心将来の英語独習を目標。

家庭部会

〈主題〉「人づくりとしての家庭科教育を考える」

場所 札幌市民会館（市内北1条西1丁目）

参加者 100名以上

1. 開会 札幌開成高校 薩 育子
2. 部会長挨拶 増川 暁兒
3. 来賓挨拶 指導主事 佐藤 祝
4. 来賓挨拶道家庭クラブ連盟成人会長 市毛 昌一
5. 講演「家庭科の今日的問題を考える。」
講師 道高等学校長協会家庭部会長

道江別高校長 磯村 尚志氏

「婦人差別撤廃条約」の中に係わる「家庭一般」の条約ができることになった発端は、教育の問題がきっかけではなく、婦人解放運動である。現在の状況としては、「国連婦人の10年」の最終年に当

たる60年を目途に批准すべく、整備に向って進んでいる段階である。詳しいことは省略する。

昭和59年12月19日家庭科教育に関する検討会議、今後の家庭科教育の在り方について（報告）を資料として説明。更に研究集録、1985年1月北海道高等学校長協会家庭部。その集録の中で東海女子短期大学教授、青木時子先生の「家庭科教育に望むこと」を参照。その他、昭和59年12月23日毎日新聞社説「家庭科教育の内容を見直そう」より、家庭科教育と母性教育にふれる共に、「家庭一般」の女子の必修・男女共修・選択履修と内容の濃い講演でした。

6. 総会

- (1) 昭和58年度事業報告 要頃 p 3 参照
- (2) 昭和58年度収支決算報告 p 4 参照
会計監査より報告（承認）
- (3) 昭和59年度事業計画 要頃 p 5 参照
- (4) 昭和59年度予算書 要頃 p 6 参照
- (5) 各支部活動状況報告
(石狩・網走・胆振支部の状況説明)
- (6) 研究協議内容 要頃 p 8 参照
- (7) 研究紀要 要頃 p 9 参照
(根釧・十勝支部と確認)

7. 研究協議会

内容については 要頃 p 8 参照

午前中のご講演について、質問用紙に、1. 条約中心の動き、2. 家庭科（家庭一般）の将来像について記入していただき、フリートーキングで研究形式とした。協議の視点は、(1) 講演内容に関する質問意見、(2) 家庭一般はなぜ必要か。詳しい内容については省略

助言者 指導主事 佐藤 祝

家庭科は、なぜ必要かについて沢山の意見・内容も異っている。その他各々受けとめ方が少しずつ異っているようであるが、この様な研修会をつみ重ね一層の深まりを期待したい。

8. 閉会式

磯村校長へ副部会長より謝辞。

家庭科のために、最後までご指導をくださり深く感謝を申し上げます。

工業部会

[講演要旨]

「高度情報化社会の実現と工業教育のあり方」

電々公社札幌無線通信部長 安倍 幸夫氏

現在の通信システムは、電話、ファクシミリ通信等、サービスごと別々のネットワークが構成され、それなりに利点も多いが、これから高度情報社会では、現在のシステムのままでは対応しきれなくなつて来る。したがつて高度な通信処理機能をもつた装置等をネットワークに組み、機能の異なるコンピュータ間の通信や、異なるメディア間の通信が出来るなど高機能化が実現し、生活形態も大きく変つ

て来る。したがって教育界においてもコンピュータ導入による新しい学習は勿論であるが、これから機械化についてゆけない生徒に対するカウンセラー、コンピュータに打勝つ人間性豊かな感情、集団生活におけるルール等、学校教育にゆだねるところが大である。

[研究発表]

①「新しい工業高校を目指して（教育課程の検討）」

名寄工業 萩原 秀仁

本校では2年前「生徒と心の触れ合いを基調においた楽しい明るい学校づくりを目指して」を目標に、新生名寄工業高校の教育構想が打ち出された。内容は5領域にわたり、学校としてできる事や、やらなければならない事、また、将来へのビジョンをうたったものである。この2年間、それなりの成果が現われ、生徒の意識に少なからぬ変化が見られる今日、この構想が間違っていないかったことを実感している現在である。

②「工業数理」（特に内容(7)、(8)の指導について）

紋別南 吉川 弘明

今や膨大な知識を扱うデータベースをもとに問題解決や推論の機能を持った第5世代コンピュータが予想以上の速さで開発されつつあり、そんな時に最も必要なものは、直観力や創造力、さらには問題を見える化する能力ではなかろうか。内容(7)、(8)には、これから時代に対応していくうえで必要なものが用意されているように思われる。より一層充実した指導が今後の課題である。

③「工業高校の現状とこれからの方針について」

美工 田納 正範

近年、産業経済の成長と享楽的風潮で倫理観・価値観の変化により、社会構造が多様化している。その結果、工業高校の教育の現状と産業構造・就業構造の現状とが適応せず、憂慮すべき問題点が生じてきており、その改善策が急務となっている。

それにはゆとりある充実した対応で、教育の原点であり心と心の触れ合いにより、豊かな人間性の育成に最善を尽し、以前のような、産業界の発展に貢献する中堅技術者を育てるのが工業高校に奉職する者の最大の使命であり、これが再生への道となろう。

農業部会

[講演要旨]

「農業教育の進歩とその課題」

帯広畜産大学教授 田島 重雄氏

からの農業教育はどうあるべきか。北海道の農業と教育の一体化の方向を模索し続けてこられた先生の、北海道での農業との出会いから、留学生と

生活をともにしたり、拓殖実習所で汗を流しての体験談などを通じ、北海道の農業教育のあるべき方針について、示唆に富んだ講演を頂いた。今春、現職を退官される先生が、北海道農業教育と共に歩んだ33年間を振りかえりながら話された1つひとつが、非常に感銘深いことばかりであった。結びに将来の課題として、

1. 各学校の現状の見直しがせまられる。
 - 地域との結びつきと、地域へのサービス
 - 生徒の興味を起させる方向。
2. 国際化と海外交流を計る。
3. 農業教育をもう一度評価し直し、見直す必要がある。

と述べられた。

◎総会報告

前日の役員会が総会を兼ねているので、研究全体会では、総会の報告が行われ、この中で、会員の意見の発揚の場を求める意見が提示された。

[研究発表]

①「農業教科指導上の新しい課題

—『コンピューター導入』

遠別農業 山田 進

農業学習の活性化を図るために、基礎的、基本的な原理の理解とともに応用へと転換する力を目ざし、実学中心の学習指導が、農業人としての資質向上の決め手の一手法として、可能な限り、地域と密着することを配慮し、先端技術のうちより、若者になじむパソコンを手段として導入し、展開した発表が行われた。そうして、このようなコンピューター導入については、

1. コンピューターの利用目的を明確にすること。
2. 内容を熟知して、どの場面に展開し、とり入れるかを考える。
3. 研修体制を今後も継続して実施したい。
4. 資料、ソフトの交換交流の組織作りを考える。
5. 地域から信頼される技術の普及につとめる

等が指摘された。

商業部会

[講演要旨]

「企業が商業教育に期待するもの」

株式会社 リクルート

教育機関広報部広報制作部

進路情報部長 橋爪 年幸氏

通信の発達により産業界の変化も一層激しく、職業選択・就職指導が非常にむずかしくなっております。北海道や沖縄での就職状況は厳しいですが、東京や大阪ではエレクトロニクス関係を中心に景気は上向きとなっています。離職率の観点から考えると、生徒に対して積極的な企業見学等の指導が必要だと思います。

今日の経済界がかかえている課題は、次の3点で

す。①高齢化社会…20～25年後には、人口の約20%が60歳以上となり、高齢者の採用基準は時間給または歩合給となります。新卒者も同じ扱いとなろう。②高学歴化と専門教育…大卒のブルーカラーの時代が到来し、専修専門学校への進学は増加の傾向となる。また、18歳人口は67年までは増加するが、高等教育機関の枠が十分でないため、学業意欲の高い者は地方から中央へと地域移動を行う。③企業の賃金体系が能力給に変化してきている。

次に、物の見方ですが、社会人と学校での見方がかなり違っており、学校でも職場型の思考を教える必要があります。学校での認識は傍観的であり、評価は絶対的で、「自分あっての学校」のように個人中心で知識力を重視しています。しかし、企業での認識は実践的であり、評価は相対的です。また、「会社あっての自分」のように集団中心の見方で、実行力・経験を重視します。このような考え方を教えておくことによって、生徒の社会における適応の幅がでてくるのではないかと思われる。当社での、社内教育の中心は、確動性・発動性・本動性・協動性です。

最後に、企業は VSOP (vitality・speciality・originality・personality) に富む生徒をより多く採用したい。従って、ソフトの時代に対応出来る教育、適応性の教育を期待する次等です。

〈第一分科会〉

[研究発表]

①「情報利用による『総合実践』」

北見商業 奥平 松一

現代社会の企業経営においては、定型的な業務は機械化が進み、業務の中心が非定型的な業務へと移行している。これからの「総合実践」は、既に学習した知識や技術の総まとめだけではなく、積極的に問題を解決していくとする意欲と態度を育てるとともに、既習の知識や技術から新しい解決策をさぐる創造性などを培う素地を持った「総合実践」でなければならない。

本校が、現在実施中の第3学年における「総合実践」の学習内容全般について言えることは、企画を行う作業を中心に据え、その中にゲームの要素を取り入れながら、問題解決型に構築していることである。現在、どのような企業でも、まず、経営計画 (PLAN) が立案され、それに基づいて業務が行われ (DO)、そして (DO) の反省 (SEE) により、再び (PLAN) が作られる。この (PRAN) — (DO) — (SEE) のサイクルは、企業はもちろんのこと、広く現代社会の常識である。

本校が実施中の「総合実践」では、(PLAN) から (DO)、(SEE) と行く流れを変えて、(DO) — (SEE) — (PLAN) というサイクル学習が流れるように工夫してある。これは、「易」から「難」へという学習の順次性を尊重するための配慮であるが、実はこれには、もう一つ大きなねらいを持たせている。つまり、この「総合実践」を (DO)

— (SEE) — (PLAN) 型のサイクルにおいて最初、計画 (PLAN) の部分をいわば白紙にして、生徒に突きつけるのである。生徒は、(DO) の段階の結果がままにならず思いあぐねているところに、情報利用 (各種の情報がデータバンクに用意されている) のヒントがわずかづつ与えられ、それによって、情報利用の方法と問題解決的思考を深めていくことになるのである。このように、1年間情報処理センターの協力を得て実施してきたが、生徒は生き生きと情報を整理し、活用して学習に取り組んでいる。また、教師もはじめ取り組みにちゅうちょしたが、現在は生徒と共に成就感をもっている。

〈第2分科会〉(生徒指導)

[研究発表]

①「本校における生徒指導の充実をめざして」

=特に女子の生活指導を中心として=

室蘭商業 大島 巖

職業高校は多様な生徒を受け入れ、生徒指導のうえで非行をはじめとする諸問題をかかえ、地域や学校の実態により多少の差異はあるものの指導に苦慮している現状にある。

少年非行も低年令化し、女子非行の増加が目立っている。非行の特徴はスリルや快楽を求める「遊び型」と学校や家庭における制約から逃れようとする「逃避型」が増えてくる。とりわけ性については解放的な社会的風潮や身体的早熟化などで性に対する考え方が安易になってきている。従って生徒指導においては非行対策や問題行動の防止のみならず、社会の風潮に主体的に対応できる人間の育成ををざす必要がある。

〈質疑応答〉(対策として)

校内的には保健の先生、養護教諭による指導 専門家 (産婦人科医等) によるリアルな話を聞かせる。

男子生徒の指導も必要

性教育に関する「思春期ブック」を図書に置くべきである。

〈まとめ〉

生徒指導全般に関する理念として

- (1) 教師間に指導上の傾斜があると一番まずい。
- (2) 生徒指導の原点は授業である。
- (3) 事前指導の必要性
- (4) 早期発見
- (5) 保健指導にもっと力を入れるべきである。

水産部会

[講演要旨]

「水産教育をめぐる諸問題について」

文部省教科調査官 勝木 茂氏

「教育改革の視点」「職業教育改革の視点」「水産教育の今日的課題について」、中教審答申 (昭46年)

以来の文教政策と今日の臨教審による教育改革の大きな変化について指摘しつつ、『文化と教育に関する懇談会』『京都座会の7つの提言』『ボイラー報告』などにも言及し抜本的な教育改革の動向について述べた。

さらに、「高等学校に於ける今後の職業教育について」の最終答申に向けての焦点について具体的に述べられ、つづいて、新しい時代に対応する水産業と水産教育に関わるいくつかの新しい構想について述べた。

沿岸重視の動向、水産従事者の高齢化、技術革新への対応なども視点に、水産教育の活性化、自信の回復、など多くの資料・文献をあきらかにしつつ今後の論議にかかる問題提起もされた。

〔報告〕

1. 産業教育実技講習参加報告

厚岸水産 高橋 生

「漁網実習」「漁貝の設計」について講習の内容が報告された。

2. 産業教育教員長期研修参加報告

小樽水産 長尾 英一

「親魚及び稚仔魚の飼育管理」について研修の内容が報告された。

〔研究発表〕

①「栽培漁業科における『総合実習』の教育内容と指導方法」

南茅部 対馬 敏幸

水産業にも技術革新による大きな変化があり、それに対応する3つの能力①新しい技術を理解できる能力②新しい技術に適応できる能力③新しい技術を創り出す能力の育成をめざし、体験的科目である「総合実習」の内容をいかに充実させたかについて発表された。

②「水産製造科における専門科目的教育内容と指導方法」

厚岸水産 中畠 辰雄

「基礎学力」から「自己教育力」の育成をめざすとりくみを柱として、地域ぐるみの教育活動、教師が課題をもってとりくむ姿勢、本当の学力を身につけさせる進路指導の視点、一日体験入学、普通科教科と専門教科との連携、「わからない」から「知っている」状態をつくる学習の動機付け、グループ学習、問題解決に意欲を示す指導方法など、多岐にわたり豊富な実践例を示しながら、生徒の生活のリズムや、「本当に俺たちのことを考えてくれている」という実感を大切にしつつ、教師の厳しさと暖かさのバランスある指導についてその現状と成果について発表された。

〈編集部より〉

第22回大会は、参加者人数が4,054名の多さに達しました。例年のことですが、午前中の全体講演では、会場は会員で立錐の余地もなく、あふれた会員はロビーに特設しましたテレビ受像機の前で、会場の雰囲気に浸った次第でした。

午前講演「なぜ、今教育改革か」(黒羽亮一氏)にしても、午後講演「北方民族における伝統と近代」(岡田宏明氏)にしましても、参加者各位に多大の感銘を与えたようです。

所で、いつも関係各先生方にご協力を頂くと共にご迷惑をかけて居ります「会報第42号」が出来上りました。勿論、「大会記念号」です。2日間に渡る大会の記録が簡単明瞭に集約されて居ります。十分にご覧の上、活用願えれば幸いと存じます。

尚、「研究紀要」「会報」関係で、何かご意見がございましたら遠慮なく編集部までご連絡下さい。

最後に、記録集約に当たりましてお骨折り頂きました関係諸先生に衷心からお礼申し上げます。

一沢田一